

水稲の高温に対する技術対策について

<高温等の影響>

- 登熟期間中に最高気温や夜温が高い状況が続くと、登熟不良や白未熟粒等が発生しやすくなる。さらに出穂後 10 日間の最高気温が高いほど胴割粒の発生が多くなる。
- 昨年度の高温等による影響で県内の 1 等米比率は 65.4%管内においては 55.9%で、2 等以下の格付けの主な理由は「心白・腹白（白未熟粒）」であった。
- 早期落水により登熟不良や品質低下の原因となる。
- 刈取適期が大幅に早まる可能性が高い

【技術対策】

- 出穂期から 20 日間のほ場内水温、地温を下げることで、胴割粒、白未熟粒の発生が少なくなる傾向なので晴天等の高温時は、昼間は出来るだけ深水管理とし、夜間は逆に落水管理とする（昼間深水・夜間落水管理）。なお、かん水は午前 9 時～1 時頃に行い、気温が用水の水温を下回り始める午後 4 時頃に落水するのが望ましい（間断かん水）。
- 十分な用水の確保が難しい場合には、走水等により土壌を常に湿潤状態を保つ（保水管理）。
- 落水時期は出穂後 30 日以降を目安とする。その後も高温・多照が続く場合は、ほ場条件を考慮し、収穫 7～10 日前まで走り水を行う。
- 刈取りに向けた準備（収穫機、乾燥調製施設等の清掃・点検等）を早めに行う。